父の無念

九十年ぶりに発見された口述筆記

講道館に楯突いた男の生涯

細川呉港（会員）

卓越した能力を持ちながら生涯不遇だった父の遺恨を何とか晴らそうと、後生大事に持っていた遺書ともいうべき一代記を、何とかこの世に出したいと――それが娘の悲願だった。

十年ほど前に私は、偶然、神保町の古本屋で、私が小学校時代に夢中になって読んだ少年雑誌をめくった。「少年」「冒険王」「少年倶楽部」「ぼくら」といった月刊漫画誌である。主に昭和30年代で私が小学校3年生から6年生ころのものである。その中で偶然出てきた田辺又右衛門という人物を「発見」した。まてよ、この名前は、どこかで聞き覚えがある名前だ―。

それは私が少林寺拳法の創始者宗道臣の生い立ちを調べているとき出会った、神戸のある道場の娘さんから預かった父親の一代記、その主人公の名前だったのである。

四代目　田辺又右衛門

田辺又右衛門、この古臭い名前の柔術家は、明治から大正、昭和にかけて西日本では有名な不遷流柔術の四代目で、折から嘉納治五郎の始めた柔道に対抗して、生涯にわたり、闘ってきた男だった。数々の講道館の高段者に対して、彼は一度も負けたことはなかった。しかし彼の秘伝の柔術の技は、嘉納治五郎によって次々

に禁止されていったのである。審判員も講道館の息のかかった肝いりが担当し、途中で引き分けにさせられたこともたびたびだった。

彼は晩年、生涯にわたって戦った数々の試合と、嘉納治五郎とのやり取りを弟子に聞かせ、「口述筆記」として残した。しかし、全国制覇をめざす破竹の勢いの講道館に対して、その口述筆記はさまざまな妨害に遭いおおやけにされることはなかった。

田辺又右衛門の武勇伝と試合の経過を直接知っている多くの弟子たちも、やがて亡くなり、あるのはただ、又右衛門の顕彰碑の中の「一代記未刊行」という文字だけである。どれだけ多くの人たちがこの一代記の公開を望んでいたかがわかる。

私は、その又右衛門の娘、田辺久子さん（当時69歳）から、口述筆記の刊行を切に頼まれた。何とか世に出してもらいたい。悲運の父の無念を晴らしてもらいたいと――。そして彼女が長い間大事に秘蔵してきた、和綴じの口述筆記を4冊おしいただいた。この口述筆記を刊行して世に問うことは、彼女の長年の願いだったのである。今から30年以上前（1987年）のことである。

しかし、私はそのとき、田辺又右衛門の生涯についてより、この道場に一時期入門していた少林寺拳法の創始者、宗道臣の話を聞くのが目的であったから、その娘さんの切なる願いを、あまり気に留めなかったのである。

その後30年たって、私は神保町の古本屋で、漫画の中で、まさしくあのときの口述筆記の主人公の名前を「発見」した。田辺又右衛門は、パロディー化されぼろぼろの羽織袴で、いかにもみっともない格好をしていた。柔道との戦いに常に最後は敗けるのが決まっていたいわば柔術家のヒールであった。

その漫画の描かれたころ、つまり昭和三十年代は、少年雑誌「冒険王」「少年倶楽部」「少年」などの中で「柔道漫画」は主役だった。「イガクリくん」「ダルマくん」「少年四天王」「嵐の講道館」など多くの漫画や絵物語が連載された。中には、梶原一騎の原作も多くある。今にして思えばそのころ、私はそういった柔道漫画に夢中だった。

熱血まんが「いなずまくん」。月刊「少年」付録　昭和30年９月（光文社）

口述筆記を思い出した私は、書棚の中に埃をかぶっていた手書きの手記を引っ張り出し、4冊分を一気に読み、驚いた。それは明治から大正、昭和にかけての日本の武術界のありさまから、田辺又右衛門の活躍と挫折、また反対に柔道が数々の柔術を押しのけて、日本制覇をしていく過程が述べられていた。嘉納治五郎や、その高弟た

ち、講道館のいまや歴史上の英雄とも称せられる山下義韶、磯貝一、永岡秀一、飯塚國太郎との試合や、やり取りが生々しく、具体的に書かれていたからである。それは、不遷流のみならず、明治維新で全国のお城に伝わった無数の流派の柔術が、講道館柔道の名のもとに、技と一緒に消滅させられた歴史でもあった。また本当は講道館一といわれた剛勇戸張瀧三郎が田辺と何度も戦い敗れたために、講道館の中で重用されず、またもとの柔術に戻って大阪で道場を開くという話も書いている。田辺ならずとも、多くの柔術家が涙を飲んだのである。

考えてみれば、一大ブームだった柔道漫画の大抵のストーリーは、柔道をやる主人公の少年、あるいは青年が、町の中で羽織袴を着たむさくるしい中年の「柔術」をやる男から、果し合いを申し込まれたり、あるいはいきなり襲ってこられたりする。この柔術家たちは多く髭を生やし、かなり悪人面をして描かれているのが特徴だった。一目で悪い奴ということがわかる。他流試合を禁止されている「柔道」の主人公は、できるだけ避けて通るのだが、防ぎきれなく、試合をすることになる。町はずれのお寺の境内とか、または因縁のススキの丘だったりする。しかし最後は、主人公の「柔道」が必ず勝つのである。

柔道漫画では常に柔道は正義の味方、柔術は悪であった。柔道をする主人公は試合の前にいきなり「正義は勝つ」などというのである。それが当たり前のように私自身もそして多くの読者もそう思っていた。しかし、本当に柔術は悪だったのであろうか？

小学生であった私は、こういったストーリー展開に全く疑問を持つことなく、「柔術は古臭くて悪い、柔道はいい」という価値観に染まっていた。しかし、田辺又右衛門の口述筆記を読むと、これらは講道館側から作られたフィクションだったことに気が付く。まさに目からうろこであった。

柔道漫画の原点はというと、黒澤明が昭和18年に公開し大ヒットした映画「姿三四郎」である。戦後、昭和20年代後半になって、月刊「冒険王」の副編集長鈴木ひろしが漫画家・福井英一に映画「姿三四郎」のような漫画を描くように薦めたのがきっかけだった。それが「イガグリくん」の漫画であった。大人気を博した。のちにこれはテ

東宝映画「姿三四郎」ポスター

スタッフ
監督・脚本：黒澤明
音楽：鈴木静一
撮影：三村明
編集：後藤敏男

キャスト
姿三四郎：藤田進
矢野正五郎：大河内傳次郎
小夜：轟夕起子
檜垣源之助：月形龍之介
村井半助：志村喬
門馬三郎：小杉義男
お澄：花井蘭子
飯沼恒民：青山杉作

レビにもなる。

さらにさかのぼると「姿三四郎」の映画の原作は、昭和17年に小説家、富田常雄の書いた『姿三四郎』である。彼はその後売れっ子の大衆小説作家として大家となる。

富田常雄について調べていると、面白いことに気づいた。富田常雄の父は、富田常次郎である。常次郎は、灘の生一本で有名な老舗酒屋の嘉納治郎作（治五郎の父）が、幕末に幕府廻船方御用達となり、維新後も海軍権大書記官となったとき、伊豆の韮山で書生見習いとして雇った少年であった。常次郎は当時14歳だったから、そのころの風習からいえば、丁稚奉公として身元を引き受けたのであろう。富田常次郎は、以後東京に出て来て、嘉納家に仕えた。また嘉納治郎作の息子の嘉納治五郎の世話をする年下の御学友として雇われたのかもしれない。常次郎は治五郎の5歳下であった。

身体が弱かった嘉納治五郎が、健康のために天神真揚流を習い柔術を始めたとき、当然のごとくお相手は、富田常次郎だった。そして何人かの人を集めて、東京下谷の永昌寺で講道館を起こした。

結論をいうと、講道館ののちの四天王と呼ばれ、また講道館の大番頭ともいわれた富田常次郎（のち7段）は、その息子、のちに小説家になる富田常雄に、初期講道館の苦労話、つまり講道館の高段者の前に、常に立ちふさがる柔術家田辺又右衛門に手を焼いたことを繰り返し、話していたに違いない。

また初期講道館で、嘉納とともに柔道に励んだ姿三四郎こと、西郷四郎が尾道で死んだとき、嘉納は「追贈」として6段を与えて、皆の前でいかに西郷がすごかったかを伝えた。このときから西郷はつくられた柔道の英雄になり、伝説化されたのである。小説『姿三四郎』はこのような背景のもとに生まれた。

辛亥革命取材中の西郷四郎（中列左端）。明治44年２月長沙。前列中央は譚延闓

そして嘉納治五郎の講道館にとっては、天敵ともいえる「不遷流柔術」の田辺又右衛門が柔術家の代表として敵役として登場する。

本当の西郷は、柔道をやっていたのは若いときのほんのわずかの間で、のちの人生は、奥羽越列藩同盟の会津藩の末裔として、長崎で同志と政治結社

孫文が長崎の「東洋日の出新聞」に謝礼に来る。左から５人目が孫文、右に鈴木天眼、西郷四郎。大正２年３月。

を起こし新聞を発行した。明治政府に反発して自由民権運動を鼓舞し、また日清戦争や中国革命の際は、西郷みずから現地に行って記事を書いた。それが本当の西郷四郎の実像であり、生涯である。中国革命の孫文や宮崎滔天などとの付き合いもあった。いわば反骨の志士であった。体制派の嘉納とは逆の立場であった。

梶原一騎原作「あらしの講道館」（昭和30年）『少年』6月号付録（光文社）より

柔術の技は多岐にわたり、江戸時代から各お城に伝わった多くの秘伝を持っていた。かつ長年培われてきた格闘技である。とりわけ田辺又右衛門の寝技はすごかった。だれも全く歯が立たなかったといってもいい。やがて寝技重視の柔術は、のちの岡山六高やいわゆる高専柔道につながっていくのである。嘉納は寝技を嫌った。

一方、嘉納は大日本武徳会にも、講道館の高弟を送り込み、人事の面でも武術界に君臨する。なにしろ学習院教頭、東京師範学校校長、文部省参事官、宮内庁御用掛と教育界でも要職を歴任した要人であった。その行政手腕もきわめて巧みだった。

その後、柔術と柔道の葛藤は、不遷流のみならず、他の柔術の流派も同じ轍を踏むことになる。柔道の普及の中で、多くの柔術の流派が、看板を「柔道」と書き換えていく。そうしないと入門者が来なくなったのである。大正8年になると各種柔術は公式に「柔道」という名に改められ、また各種剣術も「剣道」と名前を変えさせられた。

嘉納は、いくつかの柔術の技を禁止し、かつ青少年の精神修養としての柔道を作り上げていく。いわばスポーツ化していくのである。

このことは現在も柔道そのものが、試合をするうえで、勝負がはっきりしないとか、判定に持ち込まれることが多くなる結果をもたらしている。勝負がはっきりしないため、「指導」とか「注意」がマイナスの点数として加点されるようになり、また寝技もすぐに「待て」がかかる。「差し手争い」が延々と続く。そうこうしているうちに時間が来てしまう。本当はどちらが強いかわからないのである。

毎年ルール改正をしなければいけないのはそのせいであろう。そうなることを田辺又右衛門は、早くから見抜いていて口述筆記の中でもはっきり「予言」している。

「私は講道館柔道が、結局私どもと同じ柔術に戻らなければならないことを固く信じておりました」と又右衛門は述べている。

口述筆記では、西郷四郎が1度だけ、又右衛門の道場に訪ねて来たこと

も明らかにしており、田辺が「一手お手合わせを」と言って新しい道着を出したにもかかわらず彼は試合をしようとはしなかった。面白いエピソードだ。知られざる逸話はまだたくさんある。

晩年、田辺又右衛門は、柔術に伝わる、骨接ぎや整体医療をして生計をたてながら、神戸市、国鉄「兵庫」の駅前に、遷武館（通称赤壁道場）という道場を開き、後進の育成に励んだ。やがて太平洋戦争が激しくなり、神戸大空襲。道場も含めて市街地は全て灰燼に帰す。又右衛門がやっとの思いで建てた道場も診療所も、弟子と一緒に最後まで守ったが、ついに焼けてしまった。

10か月後、疎開先の兵庫県太子町鵤（いかるが）の間借りをした舎宅で、田辺は失意のもとに死亡。78歳の生涯であった。

彼の生涯は、現在の柔道に関しても多くの問題を提議している。ひとつは消された多くの柔術の技、そしてもうひとつは全柔連と講道館という柔道界の2本立ての組織である。それは田辺又右衛門と嘉納治五郎の時代の大日本武徳会と講道館の関係とも似ている。

田辺は昭和7年、63歳のとき、自分の生涯をふりかえり、弟子の砂本貞に聞き取りをさせている。それがこの「口述筆記」である。だが「何らかの事情により」あるいは妨害により、おおやけにすることができなかった。

この口述筆記が世に出ることを多くの弟子を始め、田辺の娘久子さんは何よりも願っていたのだ。

岡山県倉敷市玉島長尾に田辺又右衛門の墓をやっと探し当てた。蚊取り線香のもとになる除虫菊の畑が続く田園の中、地元では早朝山（はあさやま）と呼ばれる丘である。

そこには歴代の不遷流柔術家の墓と顕彰碑が、訪れる人もなくひっそりと並んでいた。田辺の顕彰碑は、終戦の翌年、78歳で亡くなってからやっと8年目に、28人の弟子によって建てられている。顕彰の碑文の最後に「一代記未刊行」の文字があった。

現在日本では、柔術の教室がどんどん増えている。特にブラジリアン柔術の普及はすごい。かつて日本からブラジルやイギリスに渡った「ジュウジュツ」が回りまわって日本に再上陸したのだ。アメリカでも、柔道の道場3百に際して、なんと柔術は3千、約10倍の数だという。なぜであろうか。その理由が、九十年前に書かれた口述筆記で今明らかになる。柔術復活の予言だ。

（田辺又右衛門の口述筆記『柔術の遺恨』は、敬文舎から発行された）